



夢みる庭の話

光山章

Phyto Life



目次

庭とは何か	4	平な土地から夢が生まれた	37
庭師を苦しめるグリーンなるもの	6	用と美	38
庭に立ちはだかる平成	8	感謝を込めて	44
庭はどこから来たのか(日本編)	10		
島の発展と屋戸の切り離し	12		
そして庭は途方に暮れる	15		
庭とガーデン(海外編)	16		
gardenの登場	19		
エデンの園へ	21		
隠された庭の本質へ	22		
現代の家作りの思考	23		
庭作りの思考	25		
庭作りに残る古代の思考	28		
依代としての庭	30		
庭と美	35		

庭とは何か

「庭」という言葉がある。この漢字は小さな子供でも知っている言葉であり、私たちは普段使う単語でもある。しかし、改めてその庭とは何かと問われれば、これを明確に答えることは、難しい。

私もまたその答えを即答できない一人だ。しかも、私自身は、実は四十年に渡り、庭仕事をしてきた。多くの庭を手入れし、作庭し、設計してきた。そんな私がおんなことを書けば、一般の人たちは、ガツカリされるだろうし、専門家としての信頼にも傷がつくだろうが、実はそうなのだ。正直言おう。やはり、わからない。

書店をのぞけば、多くの庭に関する書物がある。しかし、その殆どは、庭のスタイルブックと庭に植えるべき植物図鑑に過ぎない。和風、洋風、雑木風などと銘打たれ、さらに純和風、新和風、ナチュラル、モダンなど様々な言葉で庭を定型化している。まるで、庭のカタログ集と言える。また、日本の有名庭園の解説の本や研究書も多く出版されているが、その多くは、有名なその庭を解説するものであり、庭そのものを言及しているものではない。

こうした事実を考えれば、庭とは何かという問題は、考える必要のない問題であったとも言える。私たちは、当然のように誰もが庭の存在に疑問を抱かず、庭は現実「在る」ものとして取り扱われてきたのではないだろうか。私たち庭に携わる人間も、庭の良し悪しは論じても、庭の存在そのものを疑うことなく過ごしてきた。「家庭」という言葉があるではないか。家と庭は一对

の存在として暮らしを作っていることを象徴していると思ってみたり、家を建てて庭を持たぬなどと陰口を囁いたりして嘯ってきた。

しかし、仮に一人の偉大な哲学者が、目の前に現れ「では、君たちがせつせと作業し、花を植え、木を植え、石を据え、水を遣るその庭なるものは一体なんなのかね。ひとつご教示願おう」と言われたらどうだろう。

「庭とは、憩いや安らぎを人間に与える場所」だとか、「人が自然に触れる機会と癒しの場」であると答えるのだろうか。これらの解は、まるで、決まり文句の不動産の販売チラシのようで、いかにも表層的に聞こえる。経済的なコストと庭の効果のグラフを作ることになるのだろうか。金額を横軸としても、庭の縦軸とはなんだろうか。そして、なぜ、そもそも人々は庭を作り続けたのだろうか。庭は、当然、日本だけでなく、ヨーロッパにも、イスラムにも、ヒンズーにも、中国にもある。形は異なれども、庭という存在は、人類共通の「共有物」なのである。これだけ存在していて、その存在理由がわからないのでは仕方ない。ガーデンデザイナーなどという仕事柄にも都合も悪い。ガーデンをデザインすると言っておきながら、ガーデンがわからないのだ。

つまり、辞書的な、教科書的な知識はあるのだが、それらは庭を学術的に捉えているだけで、作り手として、心の底から信用する気にはなれない。また、同様に、庭の様式論、或いは市場価値のような情報も氾濫するが、これらも庭の表層を漂うばかりで、私の問い、つまり「庭とは何か」の答えにはならないように思える。この問題は、庭作りに携わる仲間だけではなく、庭に関心のある方々（庭の好きな方、庭の嫌いな方）にも知っていたら、出来れば共に考えていた

きたいと思ひ、本小文を執筆、公開することにした。

本小文では、「庭」或いは「庭の存在意義」の問題が、何故現代に於いて切実な問題になるのかをまず、冒頭に述べる。次いで、庭の発生と変遷をたどりながら、東洋に通底する庭の普遍的本質を求めたい。更に、実際の庭作りの現場から浮かび上がる意味や思考を具体的にあげ、その源泉を探る。最後に論考の総括として、当初の目論見である、現代に於ける庭、そしてその存在意義を示したいと思うが、現時点では、それは庭の周縁にしか過ぎないのかもしれない。だが、とりあえず出発したい。

庭師を苦しめるグリーンなるもの

平成になる頃、若いお客様からこんな言葉をよく聞くようになった。「庭は要らないけどグリーンは欲しい」。その背中を押すように、親御さんらしき女性が言う。「庭なんか作ったらお金が掛かるばかりだから作らない方がいい」。内心、「ごもつとも」と思う。余談だが、庭木の手入れはそれなりにお金が掛かる。大きな松の木なら一人前の職人が二日費やすなんていうのは普通で、それを最低でも毎年一回行わねば、松の樹形が乱れる。一回に松の剪定だけで四万円掛かるとすれば、その後五十年手入れして約二百万円費やすことになる。嘆かれる気持ちも分からぬでもない。ただ、松の弁解をするならば、松は剪定し手入れを続ければ、五十年経ても、大して太りも

せず同じ姿で楽しむことができる。長く楽しめる木なのだ。しかも、一年を通じて、同じ姿。桜が一般的に三十年から五十年で大木になり、朽ちることを思えば実に耐久性のある木なのだ。桜は、さらに剪定しても大して美しくならない。

しかし問題は、若いお客様の言葉だ。私たちには、十分「庭」グリーンなのだがお客様にとつてどうも、グリーンと庭は別物になっていることに気付く。果たして観葉植物のことなのか。はたまた多肉植物のことなのか、判然としない。しかも、その声は日増しに大きくなって来た。住宅の狭隘化も手伝って、これからの庭は狭くなる。庭師も、観葉植物やインドアグリーンと言われる世界を取り入れて行く必要があると場当たり的に考えて、実際その頃、随分観葉植物の研究をしたりしていた。だが、ある日、簡単な事実に気付き、あつと声を上げそうになった。新築の外構と庭を考えていた時のことだ。新築の外構や庭を考える場合、当たり前だが敷地面と家の部屋割りなどを描いた図面を基本にして描くのだが、「座敷」がないことに気付く。何を当たり前のことと庭関係以外の一般方々は冷ややかに思われると思う。今時、和室はあっても座敷のない家の方が当たり前なのだ。和室のある家さえ珍しい。珍しいついでに畳も琉球畳などになっている。

しかし、庭関係の方ならご存知のように、実は庭は「自立的存在」ではなく、座敷と対になって存在するものなのだ。(この辺りは、後ほど詳細するのでそれより私の驚きに共感して欲しい)庭と座敷は切っても切れぬ主従の関係と言ひ換えてもいい。座敷を主人とすれば庭は家来なのである。その主人たる座敷が、平成時代には「消失」したのだ。失踪し帰らぬ人となったのだ。主

人が消えた家来たる庭は、もはや庭でなく、ただのグリーンになったのである。庭として主従の関係を結んだのに、主人が失踪し、行き場を失った庭は、庭としての資格を失い、グリーンとなつてしまったのである。

あの不可解なグリーンという言葉は私たちに大きな断絶を指し示してくれていたのだ。

庭に立ちはだかる平成

平成という時代を後の歴史学者はどのように定義するのかは判らないが、五十年後、百年後には大きな転換点と記されると思つている。個人的には数百年に一度の大きな地殻変動だと思う。平成という時代は、概括すれば、江戸後期から昭和まで続いた一つの時代の終わりを示している。人口の減少、右肩上がりのインフレ経済は終焉、家制度の壊滅、超核家族化の進行、GDPの伸び悩みによる生涯所得の減少および停滞、終身雇用の崩壊、未婚率の上昇、その断層はいくつも列挙できる。まるで、地表に表れた断層の露頭を垣間見ている様相である。例えば、卑近な例を挙げれば、最近流行つている慕じまいという言葉が象徴的だと言える。武家から一般大衆にまで広がった江戸期からの家制度は崩壊し、平成は、墓を放棄する社会になった。昭和の時代まで多くの人には考えられなかった現象だと言える。それまでの暮らしは、「家」を守り、まるで墓守をすることが史上命題でもあった。生きることは墓守をすることと言つても過言ではない。そう

いう社会とは別種の社会が現れた。継続困難社会とも、断絶社会とも言える。つまり、今まで無意識に継続し、信頼してきた社会の形が大きく秩序変更されたとも言える。家族や親族でお彼岸やお盆に墓参りなどというのは、思い出のシーンになろうとしていて。そして、庭にも平成が立ちはだかつてきた。リビング中心の家は、庭の必然性を疑問視し、男女雇用均等社会でのダブルインカム世帯は、庭の手入れを拒否し始めた。庭は、もともと厄介なものなのである。気付かぬうちに、植物は繁茂し、草は茂り、おまけに、害虫と呼ばれる毛虫が湧き出す。ペットを飼うと、毎日、散歩させたり餌を与えたり、トイレの世話をするように、実は庭は手のかかる存在で、同じく庭を「飼う」気持ちがないとやっていけないものではない。

また、一方庭は元来、世間体とか見栄とか家構えのアクセサリ、演出道具という役割の片棒を担いできた。その家は、平成になり、「家制度の家」ではなく、個人の寝食小屋になったのだから、世間に見栄を張る必要も無くなった。犬や猫を好きでない人が、ペットを飼わないように、庭も要らない、と思う人が出てくるのは当然の帰結なのだ。こうなると「私は庭職人です」などと言っても、後二十年もすれば「伝統技芸の人」と思われるか、ただの作業員の呼称となるのではないかという気がしてくる。

庭はこのまま生き絶える絶滅危惧種に指定されていくのだろうか。そして、愛玩動物のように細々と生命をつなぐのだろうか。そこは、当然庭業界の一員として反論したくなるのだが、困ったことに庭の姿は、霞んでいるのだ。

庭はどこから来たのか（日本編）

庭は、一般的に日本では鑑賞する場所と考えられがちで、有名な竜安寺の石庭でサッカーをしようとは大抵の方は思わない。実際、据えられた十三個の石は邪魔で、深い白川砂利は走りにくい。塀も球技にはやや低い。余談はともかく、鑑賞して心を落ち着かす、鑑賞を通じて思索にふける、自然の機微、もののあわれを見出すという、なぜか、やや高尚な場所に祭り上げられている。しかしながら、私たちの現実の庭は、もう少し切実である。庭と呼ばれる敷地を使って暮らしに必要なコトをしなければならぬ。物置や布団や洗濯物干し、靴洗い、小さな子供がいれば夏にプールを置く場所として使いたい。それは、古代の人も同じだったろうと思う。そんな疑問に対して、庭園研究家の今江秀史氏はその著書の中で、平安時代以降の庭を「大庭」「屋戸」「坪」「島」に大別し、小学校に例えて、庭の説明をされており大変わかりやすい。現在では、どの言葉もあまり、聞き慣れない言葉だが、この言葉全体で平安時代の庭全体を指す。まず、小学校の運動場にあたるのが「大庭」。イベントなどを開く場所。校舎に囲まれた場所を「坪」。今でも、坪庭という言葉は残っている。また、自転車置場や物置がある余った敷地を「屋戸」。そして校庭に作られた池や築山（人工的に作られた土を盛った場所）を「島」と区別されている。つまり、敷地内の建物以外で余った余地全体を庭と捉えた時、島以外の余地は、殆ど何らかの

一 今江秀史著「京発・庭の歴史」世界思想社 〇頁

目的のために「使われる場所」であったとされている。見る場所ではなく、使う場所だったのだ。私たちが、現在、庭と読んでいる場所は、庭の一部に過ぎなかったのだ。実は私たち同様、家の周りの敷地で、生活に必要なことを行っていて、それも庭だったのだ。私たちが今「庭園」と呼ぶ庭は、過去には「島」と呼ばれ、江戸時代には「林泉」と呼称される庭の一部でしかなかった。そして、その後、大庭や坪は消えていく。理由は簡単で屋外で行っていた行事を屋内で行うようになったからだ。坪と呼ばれる場所は、舞台が置かれ舞踊を披露していた。囲まれているので鑑賞しやすかったからだ。また、大庭には、運動会などのイベント時に今でも行われるテントのようなものが張られて催しがされていた。しかし、時代の変遷により、これらは、屋内化が進み、消えていく。ただ、今でも京都御所や東大寺の大庭を見るとその面影が残っているのが読み取れる。また、時代劇で出てくる奉行所などの「お白洲」もこれらの名残だと言えるし、先ほどの竜安寺の庭も、お白洲の後に作った枯山水だと考えることもできる。

このように考えると現代の庭は、駐車場やアプローチなどになっている屋戸と島が生き残った場所と言える。また、庭は、建築の様式や工法の変化で姿を変えるものであることも指し示している。つまり、庭は庭として独自に「自立」した存在ではないのだ。

島の発展と屋戸の切り離し

室町、鎌倉という時代に降ると、いわゆる寝殿作りの貴族の家から、武家を中心とした書院作りの家に変化していくこととなるのだが、その中で島(庭)が何故これほど発展し、普及したのか。という疑問が出てくる。そこに、平成で失踪した座敷が関わる。この書院作りの家でこそ、座敷が誕生するからだ。武家を中心とした書院作りと貴族を中心とした寝殿作りの大まかな違いを列記すると次のようになる。

一柱が円柱から角柱に(ピタッと閉まる)
二天井が出来た(断熱性、保温性が高まる)
三畳が登場(居心地がいいベット)
四障子、襖が登場(御簾に比べ、間仕切り完璧 プライバシー確保)
五書院と呼ばれる床の間が出来た(陳列棚の誕生)

寝殿作りではあった対屋も消え、渡り廊下もなくなっていく、よく見ると、昭和時代の一般の田舎家の原型ともいえる家となってくる。まるで体育館のように伽藍堂であった寝殿に比べれば間仕切りも出来、実際の住みやすい家に変化したといえる。周囲に防衛のための塀や土塁を築いていたが、家としては個人の邸宅となったと言える。この時、坪が消え、大庭もなくなり、屋

戸と島が残る形になってくる。

書院造りの中で、特に重視された場所が、畳を敷いた(板間の場合もあるが)座敷Ⅱ書院(主人の間)であり、それと一対を成す「島」(庭)だと言える。

室町後期からの下克上の中で成りあがってきた武士の家である書院造りの家屋は、現代のような家族の寝食専用住居ではなく、オフィス兼住居であったことが窺い知れる。南側の日当たりの良い部屋に主人の書院(書齋)が置かれると共に、調度である床の間を配置し広い座敷、中の間が大抵あり、人々は北側の暗い部屋で生活している。家族中心主義の現代の住宅では考えられない仕様となっている。

座敷は、書院の床の間、庭と一対となり、客を迎え入れる特別な空間として家の中心施設として鎮座することになる。実際、現在でも、庭は座敷に座った客人の目の高さで作られることを基本としていることにその名残がある。

下克上社会というのは、実力主義社会であり、一種のデモクラシーであると言え云えるが、実力至上主義社会の武家であっても、武力だけで社会的支配を確立することは、難しい。武家であっても文化や教養を持つことは、旧勢力である貴族との関係性上重要であったろうし、武家にとっても他者と差別化するための文化戦略として機能していたと考えられる。そこに、床の間での「モノ自慢」と「庭自慢」が加わったのではないだろうか。下克上の魁であった越前の朝倉氏が京文化を積極的に取り入れたことがひとつの証左だと思う。

合理的(チカラの論理)には、必要ななかった庭(ここでは敢えて、京風庭園と呼ぶ)も、彼ら

にとつては、床の間の調度と共に、自身の文化的見識の誇示として作用したと考えられ、その欲望を背景として、島の発達を促したのではないだろうか。このことは、戦いのない時代の武家屋敷で大名庭園がますます発達することにも関係していると思う。

確かに、当時、流行した禅思想は、武士の生き方にマッチしていたし、千利休を代表する堺商人との結びつきは、軍事的・経済的な意味があっただろうが、背景には「文化的優位性」の獲得もあつたのではないか。と考える。

島(庭)は、そのため、家格、教養、見識、経済力、つまり権力や権威を暗に示す道具として発達したのではなからうか。こうした風潮は、太平洋戦争後、民間の間でも続き、昭和時代になつてからも経済的に富裕な家庭が、広大な日本庭園や茶室を持たれていた経緯はここに端を発しているのではないかという気がしてならない。

また、島の発達は、屋戸と島の分離をも促したと思える。島と屋戸は同じ庭として出発しながら、全く別種の役割を果たしている。屋戸は、実際のな生活に密着した、言わば普段着の場所であるのに対して、庭は客人を迎える晴れ着の場所として発達する。同じ庭でありながら、その各々の場所での思惑が全く違う。島は、様々な形式はあれども、池を掘り、築山を作り、石を据え、樹木を配し、和歌で歌われた景色を再現したりして、大自然を小さな箱庭として縮景する。つまり、「見立て」という抽象化が起こり、「小さな自然」として庭園風景を作る。砂利を海と見立てたり、池に水を引く遣水を山奥の清流と見立てたり、浮島を蓬莱山や釈迦に見立てたり、見立てによる抽象化が起こるのに対し、使う庭である屋戸では、その必要がないことになる。このことは、現

代風に言えば、外構、エクステリアと庭の分離に相当する。使用する庭、使用しない庭で別れていくのは当然で、現代では、よりそれが明確となっている。現在の分類では、駐車場、カーポート、アプローチ、塀、自転車置き場、門柱は外構・エクステリアと呼ばれ、庭と呼ばれる部分は意外と少ないのだ。余談だが、庭師や庭職人といえば、ややクリエイティブ・アート系、エクステリア職人といえば、やや作業系に見えるのは、この庭の性質の違いによる世間の誤解であることを付け加えておく。クリエイティブというものは本来業種でできるものではない。そう見えるだけ。私自身、ガーデンデザインなどというと、たまにややこしい目で見られので、植木屋と自称してこの難を避けていることを付記しておきたい。

また後、面白いことに、実は生垣も「外構」に分類されている。これは、実際に作業する植木職人にも奇妙な分類に感じるのだが、「使う」という点では納得できる。

そして庭は途方に暮れる

明治時代に導入された「洋風」による、応接間設置後も、座敷は私たちの一般家屋の中にも生き続けてきたが、平成は、容赦無く座敷を追いつ出し、リビングを迎え入れた。庭は昔懐かしい大沢誉志幸の歌の如く、途方に暮れることになる。島として発達してきた庭の存在理由は不明になり、庭はアイデンティクライシスを迎える。私たちも実は、この先どうすればいいの、という

ことになる。座敷のない庭は、庭「のようなもの」、庭「らしきもの」、庭「っぽいもの」となっていく。果たして庭は今後、このような疑似的な存在でいいのであろうか。座敷の喪失で、庭は消えてしまう。そんな浅い存在だったのか、という疑問が湧いてくるのである。しかし、庭は世界の共有財産である。狭い日本の文化を超えて、世界を見てみよう。そういえば、世界の庭は、座敷などなくても存在しているではないか。

庭とガーデン（海外編）

庭という言葉と非常によく似た言葉として「garden」という英語がある。庭という日本語は、島泉林、山水と昔呼ばれていた。しかし、一説には、私たちが使う「庭」という漢字は、英語の「garden」という言葉の対訳語として明治時代に引つ張りだされたという説もあるくらいだ。庭という言葉は、「廷」（建物）周囲の広い場所という意味があり、この広い場所で祭儀が行われていたという。中国の記録にそういう意味で「庭」という言葉が登場する。

古くは、「ニワ」は「ニハ」と呼ばれていた。庭という漢字には、「にわ テイ」という音訓読みがあるが、もうひとつ「バ」という音が当てられている。このバという音は、今私たちが使う「場」と繋がっていて、広場、市場という言葉聞けばイメージが湧くように、「バ」は、広く平坦な場所を表す言葉と繋がっている。

一方、ガーデン「ga-den」もまた、囲まれた土地くらいの意味しか元は有していないという奇妙な一致があるようだ。但し、想像だが、庭とガーデンは広さが異なっているように思える。ガーデンが縄張りや支配する場所という比較的大きな面積を持っていると思えるのに対し、「廷」の字を有する庭は、貴人の家の周囲を表す程度に思える。

この庭とガーデンの広さの違いを実感する逸話が残っている。明治十一年に日本を旅行したイギリスの旅行家 イザベラ・バードは、その旅行記で、訪れた米沢地方の田園風景の美しさを、豊かさを賞賛しているのだが、その表現は「アジアのアルカデヤ（桃源郷）」であり、「エデンの園」のようだと言っている。

エデンの園は、「園」と言われる確かに広い場所だが、英語では、「orchard」ではなく「The Garden of Eden」であり、彼らにとっては、庭に相当する。この広さの感覚は、私たち日本人にとっては難しい。私たちにも里山の美しさを理解することはできるのだが、それは決して「庭」ではない。しかしながら、イギリス人であるバード女史には「楽園＝庭」という世界観には適合しているのだ。「彼らの思う庭＝園」の大きさのイメージが異なると同時に、庭に求める質的内容が私たちと随分異なっていることが読み取れる。

また、この質的内容について付記すると、聖書によく出てくる植物と万葉集に出てくる植物の比較をみると実に面白い。

聖書での主な植物の頻度順 ①ブドウ(百九十三回) ②コムギ(六十回) ③イチジク(五十二回) ④アマ(四十七回) ⑤オリーブ(四十回) ⑥ナツメヤシ(二十七回) ⑦ザクロ(二十六回) ⑧オオムギ(二十六回)

日本の万葉集での主な植物の頻度順 ①ハギ(百三十八回) ②ウメ(百十八回) ③マツ(八十一回) ④モ(藻)(七十四回) ⑤タチバナ(六十六回) ⑥スゲ(四十四回) ⑦ススキ(四十三回) ⑧サクラ(四十二回)³

ヨーロッパ世界では、一神教に端を発する「人間(人工=art) .. 未開(自然=nature)」という二項対立的世界観を持ちながらも、日本のように菜園や果樹を庭文化から排除していない。聖書に出てくる植物は、日本人から見れば、実に生活に密着した有用植物であることに驚かされる。彼らにとっては、なぜか高尚な日本の庭と違い、暮らしやすく、果実が豊かで、安全で快適な場所(領地)を庭と感じているように思う。

3 中尾佐助著 「聖書と万葉の植物 週刊朝日百科 世界の植物」 朝日新聞社 3323頁

そうなると彼らのガーデンの始まりを考える必要が出てくる。一体ガーデンはどこからきたのだろうか。

Garden の登場

現在のガーデンに続くものは、世界的には約八千年前。移動生活から定住生活に移り、農業が始められてから出来たのではないかと云われている。昔のことなのではっきりとはしていない部分も多いが、メソポタミアに始まり、エジプト、ペルシャへと続き、相互に影響してガーデンは発達している。

確かに、考えてみれば、農業の絶対条件は、水の確保であり、水を操れる技術(灌漑)、平坦な土地、さらに害獣から作物の防護が必要になる。ここに「garden」の原義に近い空間が生まれってくる。また、農業を行うことによって、狩猟採取生活にあった原始共産的な世界が終わりを告げる。農業による大きな人口を養う力は、富の蓄積と偏在を生みだし、所謂、「文明」が世界史に登場してくる。族长や酋長は「王」として飛び出してくることになる。この文明の登場と共に、ガーデンが作られていく。それは何故なのだろうか、推論してみる。

農業の発達は、例えば、栽培品種の多様化、交易による外来植物の増加、園芸技術の進展などが挙げられるが、これらは全て庭を作る背景条件として適合するよう思う。平な土地を作り、柵で囲み、好きな植物や果樹を繁茂させ、さらに珍しい植物なども植え、水を遣り育てる。安全

で快適で好ましいその場所は必然的にガーデンに到達するように思えるのだ。

また、もう一つの重要な点に着目したい。これらの諸要素は、人間が世界を作り変える技術・知識を会得したと言えることだ。それまでの採取生活では、自然の恵みを「受動的」に受け取り、それを与えてくれる神々や精霊に感謝することを基本にしていたと思われるが、人間が「能動的」に自然を作りかえる農業（ある種の自然破壊）では、人間が自分たちが思うように主体的に自然を作りかえ、自分たちの欲する世界を目指すことになる。庭作りという行為にも、まさにこの点を深く抱えている。自分たちにとってどのようなスタイルであれ、好ましい場所に世界を作り替える行為に他ならないからだ。そのように考えれば、「人間が考える自然≡不自然（*artificial*）」の中から庭が出現するのは必然であつたろうと思う。

このことは現代の庭とも通底している気がする。現代人は庭に何を望むだろうか。それは、ひとつには安全であること。食物や植物が豊かであること。美しく好ましいものに囲まれていること。また、ここに宗教的要素を付け加えるとすれば、神（精霊）と結ばれることとなるだろう。農業による技術獲得と、その技術がもたらす自然への能動的世界観。この二つが文明とともに庭を登場させた理由と思えるのだ。

その姿は、やがて、メソポタミアのギルガメッシュ叙事詩の中に表れ、同じく、バビロニア空中庭園、ギリシャのアルカディア、紀元前六世紀のインドの祇園精舎、そしてエデンの園へと姿を変え、受け継がれていく。ただの「囲まれた平らな場所」が、理想郷、桃源郷、楽園、オアシスと変貌していったのではないだろうか。庭は、自然の中に求める人間の幻想のカタチとも言える。

人が夢みる場所なのだ。

エデンの園へ

ヨーロッパで一番有名な理想の庭は、おそらく「エデンの園」だろう。しかし、実際のエデンの園は記述が少ない。幸福の木（樹種不明）や知恵の木（多分リングゴの木）がわかっているくらいで、その形も大きさも、わかっていない。実に空白の多い庭なのだ。そのため、人々は、その余白を自分らしく埋めることができる。現実のエデンの園は、記録にないのだから、自分で夢みることが許される場所でもあるのだ。ヨーロッパの庭では、よくギリシャ風の塑像や噴水が散見されるが、不思議に思われた方も多と思う。キリスト教世界で、なぜかギリシャの神々が祀られているのだ。日本にある洋風庭園にも同じように塑像が飾られているのを目にする。

結論から言えば、これは、目に見えぬエデンの園を追い求め、ギリシャのアルカディア（理想郷）と結びついた結果だと考えられている。そのためギリシャ風が輸入され、ギリシャの多神教的神々もエデンの園に引っ越して来たという訳だ。日本の庭にも弁財天や不動明王というインドの古層の神々や仏様、蓬萊山だのが引っ越してきているのと同じだと言える。

創世記に記されているエデンの園は、最初の七日間が終わった後、アダムが泥から創られ、その後アダムの管理下で植物が植えられていくことが記されているが、実は創世記では最初の二日

目に植物が創られているので、エデンの園にある樹木は、聖書に出てくるような人間にとって有用な植物であろうことが想像される。

このことは、エデンの園が自然の森ではなく、まさに人間の代表であるアダムが作った庭であることを示している。最初の人類は、庭師であったとも言える。イザベラ・バートが言うように、豊かな果実や花に囲まれ、美しく安全な場所。人間が夢見た「自然IIガーデン」なのである。そして、その姿は、実は家や建物に依存した存在ではなく、理想の自然として「自立した」存在であることがうかがえる。

隠された庭の本質へ

庭およびガーデンを見てきたが、その庭にはまだ見えぬ、隠されてきたものがあると感じている。庭は、有用植物を集めた博物館ではない。安全な敷地だけでもない。そして、合理的に作られるだけのものではないのだ。よく考えれば、庭はいつも、美を求められる。

その美は、国や地域、個人でも異なるが、美を求めない庭はない。どの地域でも美を感じない庭はその存在価値さえも疑われるのだ。美とは何かと言うことが問題ではなく、美を求める心の場所として庭が選ばれていることが問題である。家や他のものにも美を人は求めるが、庭は、美のみを目的にしていると言えるほどの絶対条件となっている。

さらに庭には、前述したようなギリシャの神々だけではなく、東洋の神も、また、キリスト教以前の古い神々、ゴブリンやカーゴイル、小人などの精霊たちが集まる場でもある。それはなぜなのだろう。一神教の強い神ではなく、多神教の弱く小さく、自由な神々、それは精霊とかスピリッツと呼ぶ方が似合っている。その精霊が庭に集まってきている。

そして、美や精霊を呼び寄せる庭は、普段私たちが意識していない古い思考で作られていると言うことも重要な事実だ。庭を作る思考は、実は自動車やビルを作る思考と全く違う思考形態で作られている。その思考は、恐らく、無文字社会の思考であり、未開民族に残る思考なのだ。では、現代の家作りと庭作りの対比から、その思考を探ってみよう。

現代の家作りの思考

庭作りと家作りは、元来、同じ「手作業」だった。しかし、現在ではその姿を大きく異にしている。戦後、住宅問題の解消、高度成長期のマイホームブームを背景に、戦後、家の建築は、近代化の道を辿り、工業化されてきた。

従来、家の建築は「棟梁」と呼ばれる職人を中心に地元の間人である「男衆（おとこし）」などを使いながら、行われていたが、建築基準法の施行、建築士を中心とした徹底的な分業などを背景に、パネル化、プレカット化、乾式化などが進み、予定通りに合理的に産出される「製品」

として取り扱われるようになってきた。まさに「工業化」されたと言える。

建築現場から棟梁がいなくなり、作業員という人々が家を組み立てる、まさに工場労働と生産の関係が成り立つ。実際、ある住宅の新築現場で私自身が体験したことだが、お客様が家の「棟上げ」を行われるというので、参加させて頂いたことがある。神主の方が来られて、棟上げが始まるのだが、肝心の「棟梁」がいない。現場におられた大工さんに「棟梁役」をお願いすることになるのだが、彼は日雇でその日来られていた大工さんであったため、非常に恐縮されて式がなかなか始まらない。そこを家主と神主の御説得で無理やり棟梁役を引き受けて頂いた記憶がある。現在の家建築を象徴している出来事だと言える。

予定されている材料を工期に従い現場へ運び入れ、分業体制の中でそれらを組み上げるという製作手法となるため、一方では、徹底的なクラッシュ&ビルドを行う。古い家の材料を使うことはなく、すべて撤去されるのだ。

戦前の日本の地方都市では、棟梁を中心とした一部の専門家と村人で古い家屋を取り除き、その古材を再利用する「手仕事」を通じて、家を再生させていた。しかし、個人の技術に左右される大工仕事、天候に左右されやすい左官仕事など、非効率的建築手法は現在、ほぼ姿を消そうとしている。通常、一軒のそれなりの屋敷を建設するためには、一年は優に費やしていた。特に土壁は、下塗り、中塗り、上塗りを乾燥させるためには一年は優にかかる湿式工法で、工期が長く、安定しない。そのため、所謂「左官」の領域も随分と減った。そういう意味では、現在の家は、塗る場所のない「貼る」だけの家であるとも言える。そして、古代から手仕事の産物であった家は

はなくなり、工場で産出される「箱」になったと言える。

庭作りの思考

一方、庭作りはどうだろうか。庭作りは、戦後の工業化、近代化の波に取り残されたカタチで現在も続いている。使う庭としてのエクステリア・外構の思考がメソッドとして入ってきて随分凶面化されてきたが、本来的な庭作りでは、ほぼ凶面化されないメソッドで庭は作られてきた。その原因を辿れば、幾つかの要因が考えられる。ひとつには、植物などの生鮮品を扱う難しさ。生物を工場ラインに乗せることは非常に厄介なのである。もうひとつは、庭を規格化することが困難であることだ。敷地のカタチや方角に左右される庭は、「坪」及び「平米」の単位で価格標示することができる家建築に比べ、庭工事ではそれが表示できないのだ。次に考えられることは、石や土、樹木など「自然物」を取り扱うこと。自然物は、大小様々で、凶面化したところでそれと同等のものを揃えることは難しい。品質も揃っておらず、材料が均一化できないため、工業化には適していないと言える。

そして、最後に「美」を取り扱うこと。庭の美は、その場で追い求めながら作られていくものであり、完成予定図に向かっていくものではないのだ。この感覚は「手繰る」という言葉で表現するのが最も近い。手で美を探しながら、見つけていくのだ。実際、自然物を扱うため精緻な完

成模型を描くほど制作は困難となってしまうジレンマを持っている。

このことは、制作体制にも当てはまる。家の建築の場合、ご存じのように、まず、最初に行われるのは、解体、次に、整地という土木、家の基礎、プレカット材料の組み上げと進む。そこに参加する人々は、別事業体に所属するそれぞれの職人で、一貫しているのは、建築会社と設計士だけとなる。

一方、庭仕事では、設計者である庭師も古い庭の解体、樹木の移植などプレイヤーとして常に関わる。庭仕事では、多くの場合、古い庭に残る材料はリユースするため、(廃棄する場合もある)、再生させる庭のリソースの確認として解体は、重要な意味を持つのだ。現在では、庭にも設計図面を求められるようになったが、過去には、図面というよりも大まか構想図が示されるかどうかという具合だった。少し長く難解だが、庭師の仕事の進め方をご理解いただくために、竜安寺の石庭を考察した、フランスの美学者であるダニエル・シャルルの文章の中の庭師の仕事ぶりを書いている記述を紹介したい。

「石庭について、造園上必要な前提条件としての設計図を画定したがる傾向が斥けられる。このことは、例えばラングドン・ワーナーという筆者が指摘した身体性という所見を裏書きする。それによれば、日本の庭園設計者は、「幾日もの間、一日の様々な時刻に、様々な天気のもとで用地に眺め入りはしても、……殆んど平面図やデッサン」を用いることがないというのである。彼は、トレースするというよりは、地図を作製するというべきであり、「歩きながら、地面に立って行くための小型の杖を入れた籠を持っている」。つまるところ、彼の仕事は地面を響かせる

―ここ、かしこから生ずる生の音に学ぶ―ことなのであり、知的もしくは抽象的なプログラム化の全てを身振りよってショートトさせてしまう、巡回的な、音楽的な、身体的な作業なのである。さらに言えばその行程は歩行に外ならず、線引き、測量というよりは周回運動であり、大地を統御するよりもその起伏に従順に、遍歴することなのである。庭師の残す標は、プランニングあるいは測量図を必要としない。それは、記憶を助けるだけの標である―そして、それは忘却が支配していることのしるしである。」⁴

おそらく庭作りの仕方を見たことがない施主の方であれば、何か祈りの儀式か、祭礼でも行っているかのように思われると思う。机の前に座り、CADで設計図を描く設計士とは随分かけ離れた仕事のやりようなのである。このようなやりようでは、確かに近代化できない。

庭ではこのように前近代的ともいえる「手仕事」の思考が今でも残っている。例えば、庭石を例にとれば、庭石はある時は、景石となり風景を縁取り、土に埋めれば飛び石、土留めに使えば石垣と変化する。同じ素材を「据える」「埋める」「積む」「置く」「立てる」という手仕事で意味や役割を変化させるのだ。このことは、平安期書かれた「作庭記」にも表現されており、作庭記は、「石立」から始まるのだが、現代までの間、庭作りの思考は実は全く進歩していないと言える。このような思考作法は、現代建築には残っていない。

↳ ダニエル・シャルル著 渡公三訳 「安寺石庭のための註」 現代詩手帖 ジョン・ケージ 4月時増刊

庭作りに残る古代の思考

庭作りには、先述したように、現代でも、庭石や樹木を再利用する思考が残っている。これを現代的なりサイクルと呼びたいところだが、そうではない。庭作りに残る「手仕事」の跡は、縄文時代の縦穴式住居にも、未開社会の家作りにもある考えに通底する古い思考だからだ。

目的は、庭を作ることだが、その庭は設計室で合理的に図面化されたものでなく、その場で材料を見繕って、再構成するというものだと言える。庭には明確な完成図はなく、石や木を触りながら、浮かび上がるイメージを辿りながら臨機応変に変化して行く。そのため、現代的な「完成」はなく、本来、その場にあるものであるがままに作られて行く傾向があり、気に入らなければまた、同じ行為で作って直していくのだ。幼児が積み木遊びする様に実に似ている。古代の人々が、自然の中からいくつものモノを取り出し、それを組み合わせ、モノを作る思考に実に似ている。

キリスト教など一神教社会では消えてしまったが、これら手仕事の世界は、モノを物質としてだけでなく「擬人化」する思考も含む。それは、庭の景石を据えていく思考にその痕跡が残っている。

例えば、石を据える時、庭師は「石の顔」を探す。その石の最も見栄えの良くその石らしい部分を「顔」と擬人化し据え、次に据える石は、最初の石に任せる。最初の石に「意思」を見出し、石との対話にも似たコミュニケーションの中で庭作りを行っていく。ただの鉱物であり、無生物をまるで生き物のように扱う。庭作りとはこのように世界を作る手法であり、思考なのだ。積み

木を触っている内に、知らず知らずに、それが何かのカタチに見えて、様々な積み木を連鎖させ、積み上げ、また、崩しながら、自分が作りたい世界に到達する。そのような感じなのだ。この作業は、音楽家に近い思考だとも言える。最初の音を下の音として次の音をミ、そしてソと置くことによって、個々には意味のない音が、旋律や和音として機能し「姿」を表してくる。人間は、自然界に存在する様々な音から、任意の音を抽出し、それを組み合わせて「意味」を見出す「思考方法」を元来持っているのだ。この思考は、庭以外にも音楽や言語、神話や伝承に残る思考だと言える。

言語は、無数にある音から日本語であれば、五十音ほどを取り出し、これを組み合わせ「言葉」を作り、また、神話では自然界にある様々な事象から、鳥やクマ、ヘビやワニなどを取り出し、これらをつなぎ合わせ「物語」を作る。民俗学者であり構造主義者であるクロード・レヴィ・ストロースはこれらを「野生の思考」と名付け、手仕事を「ブリコラージュ」と呼んでいる。庭作りの思考は、現代人である我々が普段あまり使わず、忘れてしまったかのような古代の思考の上に成り立っているとも言えるのだ。

一見すると、もの作りでは、同じに見える家と庭だが、そこで使われている思考は大いに違っているのだ。家作りの思考を新しい思考、庭作りの思考を古い思考と名づけることもできるが、

実は新旧ではなく、普段の生産的・合理的な仕事ではあまり使わなくなっただけで、現代でも我々が保有し併存した思考なのだ。それは手探りで、絵を書いたり、詩を書いたり、パッチワークをしたり、テーブルをコディネートしたり、服を選んだり、インターネットで調べものを行っている時を考えれば誰しも行っているのだ。

依代としての庭

庭には、実に多くの精霊が集まってきている。先述したギリシャの神々、主神デウスや芸術の神アポロン、愛の神アプロディテなど多くの神々の塑像が庭には置かれている。そのほかにも、カーゴイルやニンフ、地下世界のドワーフやゴブリン、森の小人などもある。日本の場合、造園家であり庭園研究家の重森三玲は、日本のストーンヘンジとも言える神が降臨する磐座や磐境に日本庭園の始原を見出し、その面影のある石組みを称えている。余談ながら、日本の庭によく置かれている親子ガエルや信楽焼の狸は残念ながら昭和に入って流行した置物に過ぎない。

御神木や御神体として石や木の中に精霊を感じる思考は、日本では八百万の神として今でも広く知られている。しかし、先進国と言われる経済の発達した国では、こうした多神教的国家が少ないため、このことを「日本的」と解されているが、実はそうではない。一神教で覆われる前の世界では、世界中にも日本のように精霊に対する思考が残っていた。

世界各地には、世界樹神話というものが残っている。地域により、樹種も異なるが、大まかな世界樹に対する話は異ならない。

樹木というのは、冷静に考えれば、人間が地球上に登場するよりも古くから存在し、大きく、長生きであり、地下世界と地上、そして、天上界を繋ぐ偉大な生き物と言える。

「遠い昔、人間が地球上に姿を現わすはるか以前に、一本の巨大な樹木が天までそびえていた。宇宙の軸であるこの樹は三つの世界を貫いている。その根は地下の深淵まで伸び、枝は天の最上層に達する。地中から吸い上げられた水は樹液となり、太陽の光からは葉と花と果実が生じるのだ。その樹に沿って稲妻が走り落ち、雲を集める樹頂は豊饒をもたらす雨を降らせる。樹は垂直にそそり立ち、天上界と冥界の深淵をしっかりと結びつけている。樹の内部では宇宙全体が永遠に再生をくり返し、あらゆる生命の源であるその樹は、いく千もの生きとし生けるものを保護し養っている。根の間をあまたの蛇が這いずりまわり、鳥たちは枝で翼を休める。ほかならぬ神々さえもそこを住処としていた。」とされている。

世界樹は、このように見ていくと、命の根源であり、生命を養い、世界を繋ぐ依代として扱われている。世界樹自体が神ではなく、世界樹を通じて精霊が現れる依代なのだ。依代は、現代でも神が依つくものとして、樹木、石、柱など様々な形で神聖視されている。女性の姿に変えて、

神の言葉を伝える巫女や能の舞台背景に描かれる老松もこの依代の一つである。そして、日本庭園の源流と言われる磐座もまた依代だ。植物は、生命として動物である人間の先輩であり、不死の力を秘め、巨大な体を持ちながらも、人々に果実を恵み、雨や酸素も与える存在であり。そして、天と地下世界を結ぶ存在だと言える。

日本のスピリッツで植物と石を代表する話は古事記に残っている。古事記にはコノハナサクヤビメ（木花之佐久毘売）という可憐な名前を持つ神がいる。名前の通り、草花の神であろうと云われている。彼女には、イワナガヒメ（石長比売）という姉がいる。名前の通り、石を表していると云われている。庭師から見れば、この姉妹は「庭」の神様にも見える。石と植物なのだ。一方、コノハナサクヤビメは、美しくも限りある命であり、イワナガヒメは醜くとも永遠の命を表している。現代人から見れば、石は鉱物であり、花は生物になるが、現代科学でも生物と無生物の垣根が実はないことが証明されてきたように、古代人が、石と草花を一つの命としてみていたことは極めて当然に思える。

一般の方々は、庭をご覧になるとき、美しい樹木や草花に目を奪われがちだが、庭師が最も關心するのは石の扱いだと言える。石は、重く硬い存在だが、一方で「永遠」という力を持つ特異な存在であり、命あるものを逆説的に輝かせる役割をしている。石をうまく扱えないと、植物が活きないとも言える。庭づくりは、ただ、単純に石を置いたり、植物を植えたりする行為ではない。極言すれば、石と植物で「理想世界」を作る行為であり、こうした世界観のない庭は、庭と呼べず、植林・緑化に過ぎない。

庭作りを行う者にとって、このスピリットの話は非常に気になる要素を含んでいる。私たちは、例えば、数万種ある植物から適当に木や草花を選び出して植えているわけではない。当然、気候や土壌、日照でその場所生育できる植物は限られてくるが、庭作りは、生育できる植物を植えるだけの場ではない。庭作りは、先に記したように幼児が積み木を触っている内にそれを何物かに見立てて追い求め、辿るように作る古い思考によって本来作られるものなのだ。木を植え、石を組むが、石や木に目的があるものではなく、世界樹神話にみられるように、木や石を媒介者Ⅱ依代として捉え、その背景の世界を探る行為ともいえるのだ。その背景とは、楽園や理想郷、自然風景の中の神々しい世界に「美を介して」触れる手段とも言えるのだ。花を介し、樹木を介し、石を介し、それらの織りなす世界の中に、様々なスピリットが舞い込む世界が庭であり、庭作りだと言える。

実際の庭作りの現場に携わった者であるなら、誰しも共通し、共有する体験をする。家の周囲に、石を配し、木を植え終わると、作庭前まで、地上に浮いていた家が、地面に強く結び合わされたように感じるのだ。この不思議な錯覚は、ほぼ作業した全ての人の胸に去来する。朝には工事現場であった場所が、夕方には、この地球の一角として佇むものと変質していく。綺麗に洗われ、水に濡れた石、風の通り道を示す樹木の枝や葉の揺らぎ、ひっそりと佇む草花の風情、ただ庭が完成したのではなく、庭が依代として何かを運んできていて感じる。

最後に、樹木と精霊の関係を非常に視覚的に捉えられる話を記す。1997年に生まれた藤原成通の日記に残る逸話だ。彼は「鞠聖」とも呼ばれた蹴鞠の名人だが、彼の日記によると、蹴鞠の

千日行を終えた夜、蹴鞠の精霊が彼の枕元に現れ夜物語をすることが記されている。精霊は、普段は柳の林で暮らすのだが、蹴鞠が始まると樹木から、フワフワと浮かぶ蹴鞠に乗り移るというのだ。すると、鞠は一層飛び跳ね、地上に落ちなくなる。今でも蹴鞠を行う場所には、四方に樹木が植っている。そして、成通卿は、蹴鞠場にある木は切った木では駄目で、必ず生きた木でないといけないと記している。この話では、スピリットが木を媒介（メディア）として私たちにの世界にやってくることが実に可視的に描かれている。精霊が蹴鞠に乗り移る姿が目には浮かぶようだ。

一方、庭作りの現場では、この作用が可逆的に起こっている気がする。つまり、木や石を通じて、精霊の世界につながるという感覚だ。この感覚が、先の家がその土地に結ばれる時に、私たちに蘇る古い記憶なのではないかと思う。もし私が、古代人だったら、庭が完成した時に、皆の前でこう叫ぶだろう「今、私たちが祀った木と石を通して、精霊が来られた。この家に精霊が宿られたぞ」と。

庭と美

人はなぜ美を求める心を持つのだろうか。客観的な美醜はともかく、人は誰しも美を求める心を持っている。白いプラスチックのプランターに植えられたパンジーにも、壮大な庭園にもそれぞれが求める美を追っていると言える。

最近では、芸術という摩訶不思議な衣装を着たアーティストなるものが溢れているが、才能や特別な能力、商品としての美などは関係ない。どれほどささやかでも、人はそれぞれ美を求める心を宿しているという事実が大切だ。この心は、なんのために付与されたのか、という問題だ。私たちは、農業を始めた八千年前から、労働と収穫を計算する数式的世界を持ち、合理主義を発達させ、さらに十七世紀以降デカルトから始まる個人の誕生によって、近代合理主義を主な思考として最も尊重している。そのため、長らく、大量の生産と大量の金銭が人間を幸せにすると信じられてきた。しかし、一方、経済的な豊かさや合理主義の追求だけでは、私たちは幸福にならないことを今や私たちは知っている。そんな時、美を求める心は、行き詰まった私たちの心に設置されてきたもう一つの窓のような存在ではないだろうかという気がするのだ。誰のためでもない美を求める心は、本能のように振る舞いながら私たちに必要な思考として働いている。評論家の小林秀雄は著書「美を求める心」でこのように記している。

「私は、美の問題は、美とは何かという様な面倒な議論の問題ではなく、私たちがめいめいの、小さな、はつきりとした美しさの経験が根本だ、と考えている。（中略）美しいと思うことは、

物の美しい姿を感じる事です。美を求める心とは、物の美しい姿を求める心です。』⁷

私たちは、論理性や合理性を働かせながら、一方、美を求める心も働かせながら生きている生き物だと思ふ。その心の奥底には、論理性や合理性のない、全く別種の思考が眠っている。純粹にそのものが美しくあれと願う気持ちと言つていいかもしれない。庭の中には、その気持ちが眠っている。定型化され、商品化された美ではない。一人一人の心の中に発する、この世界が美しいものであつてほしいと願う心の集積だと言える。

庭には、美を求められるが、それは芸術でなく、石や木や花を使って、この世界が美しくあつてほしいという人間の願いなのだと思う。その切片を庭という場所に感じたいのではないだろうか。このように考えると現代の庭は知らぬまに、随分形式化され、形骸化してきたもののように思える。私たちは、いつしか庭を「モノ」として捉え、時に「商品」とし、「芸術」とし、庭に流れる私たち人間の本来の心を無視してきたのではないだろうか。このことは、庭を作ることを生業にした庭師の問題であり、庭が人々から遠ざかり、ただ、ありがたく鑑賞する対象となつてしまった要因かもしれない。庭のこめられていた様々な喜びや願い、祈り、畏れが消え去り、カタチだけが残つているとも言える。そして、このことは、和歌の世界で起こつたように月を見ていないのに月の歌を詠み、花を見ていないのに花の歌を詠む行為に似ている。

「小林秀雄 小林秀雄全21 「美を求める心」 新潮社 251頁

平な土地から夢が生まれた

庭は、洋の東西を問わず、平な囲われた土地に生まれ、人間の主体的な営みで、好ましい自然を作ることを目的としてきたことを見てきた。そして、その庭の中は、古い人間の思考で作られ、この世界を愛しく眺めたい美を求める心と精霊たちとの出会いの場所であり、人々が夢みる場所であると言える。世界中の人々が、庭を手放さない理由はここにあると思ふ。

庭は、グリーンと呼ばれるマテリアルな存在ではない。庭だけが、「ガーデニングとING」を常に持つように、厄介で可変で、自分で作ることでできる場所なのだ。その姿はまさに「美しい世界を求め続ける生命の気持ち」そのものと言える。そして、世界に目を向ければ、座敷がなくとも消滅することのない「自立的」場所だったのだと言える。

未開部族と呼ばれる無文字文化の人々が、自分たちの住む森について驚くべき知識を持つていることは現代の民俗学者が解き明かしている。当然、サピエンスとして彼らの脳は私たちと何ら変わらない。最近成り上がった「現代人」としての思考が、庭を見えなくしているだけなのだ。庭の形式や姿は、文明と共に変遷するが、全ての庭に込められているのは、未開人だった頃の私たちの古い記憶なのだ。そして、今でもその記憶によって世界各国で庭は作られ続けているのではない。庭を失った時私たちは、その記憶を失うことになる。

用と美

さて、日本の庭に戻ろう。座敷と言う主人を失って悲嘆に暮れて、出発したが、本来庭は自立的存在であることも分かった。

先に記したように日本では、屋戸と島が生き残って庭となっている。そして、島と屋戸は、別種の性格を持つため、現代的に言えば、外構と庭に区切られている。この二つの区切りは幻想ではないのかという疑問である。島の発達によって、抽象化し非日常化しすぎたために分断したに過ぎないのではないかという推論である。現代のリビングを中心にした庭空間は、「普段の暮らし」を支えることが主目的になったと言える。そのような場所で抽象化は必要なのだろうか。庭もまた、普段着の庭に着替えることが求められているのではないだろうか。

そのヒントになる庭が日本には残されている。日本庭園の中で異彩を放つ茶庭だ。

茶庭という言葉は、意外なことに幕末以降に使われた言葉で、茶人は、これを「露地」と頑なに呼ぶ。簡単に茶庭と呼ばれるものを説明すると、茶庭は、茶室に至る経路として、寄付、待合から始まり、中門、腰掛け待合、路地、そして茶室を含む空間を指す。この中に、日本庭園の三種の神器と言われる「蹲、灯籠、飛び石」がある。この三つを作れば、日本庭園風に見えるという意味だが、茶庭の歴史は、それほど深くはない。有名な千利休以降のものであり、寺社仏閣でしか使われていなかった灯籠を庭に入れたのもこの時以降となる。蹲は、茶室に入る前に身を清める場所であり、「洗面所」は言い過ぎかもしれないが、機能的にはそのような性質を持つ。

この庭には、二つの点で特異な性質を持つ。一つは、茶会を催すための「使う庭」であること。当然、鑑賞もするが、使うことを重視して作られている。次に、茶庭は「等身大」で作られていることだ。日本の庭が、まるで大自然を網で掬い取り、小さな籠に入れるように縮景されているのに対し、茶庭は、実物大で作られている。茶道が発達したのは、大阪の堺だが、あのような街中で広い庭を作る訳も無いが、茶庭は「市中の山居」を目指している。市中の山居と言うのは、簡単に説明すれば、街中でのいるのに、山の中で暮らしているような世界観を指す。かなり、特異な作りなのである。この二つの特徴を聞いて、多くの方が胸に手をやるのではないだろうか。便利な住宅街に一戸建ての家を建てる。駅からも近い。ショッピングモールもあるし、学校へも便利だ。しかし、自宅に向かうとそこは雑木林に囲まれた別世界であり、しかも、庭では色々用事もなさなければならぬ。茶庭は現代人の私たちと同じように「夢みる」矛盾を内包しているのだ。現代の私たちの家や庭に対する憧れに実に似ていることに驚かれると思う。

茶庭は、枯山水式庭園も縮景式庭園も否定し、抽象化をやめ、実物大の自然風景を取り入れ、茶室へ向かう道を作った。そのため通路までも露地として取り込んだ庭なのだ。例えば、役石という言葉が茶庭にはある。役石とは目的を持った石ことで、蹲を構成する石は、ただ、意味なく並べられた石ではなく、湯桶を置く石、手燭を置く石と決められている。冬の茶会で暖かい湯を入れた桶と夜の茶会で灯りを置く石といえはご理解いただけれると思う。また、一見、ランダムに並ぶ飛石も、（流派によって異なるが）右足から歩くか。左足から歩くか。ということを考え、据えられている。その他にも、亭主が客人をお迎えし、挨拶する石、これは通常やや大きめで立

ちやすい石を使うが、このように様々な役石が置かれている。

私が、初めて茶庭の手入れを専門でされている茶庭師にご指導頂き、学ばせていただいた時、その意味ある合理性に心底驚嘆し、ひどく感動をしたことを憶えている。つまり、露地と呼ばれる茶庭は、実際に使いながら、市中の山居という世界観に覆われた世界を実現している。これを一般には「用の美」と言われるが、ここでは「用と美」二つの概念を融合させた手法として理解すべきだと思う。

現在、庭と呼ばれる場所は、過去、屋戸や大庭を含んだ使われる場所であったことを冒頭示した。現代で言えば、駐車場や駐輪場、物置、立水栓などがそれにあたる。しかし、いつしか私たちは島だけを取り出して、庭と考えるようになったが、露地の世界では、旧来の庭を否定し、目的に向かう路をも含めて一つの世界観を作っているのだ。

もしこの考えを、現代の家に援用するなら外構と庭を分離せず、家をも含めた「全体性」をデザインし等身大の世界を作ることになる。旧来の日本の庭では、物干しや物置、水栓や畑などが除外されてきたが、露地では、雪隠と言われるトイレ、腰掛け待合と言われるベンチ、塵穴というゴミ箱までも庭に取り入れられている。

そうであるならば、私たちが、友人と楽しむBBQをするコンロ、ピザ釜、また、昼寝をするハンモック、子供たちの砂場、布団干しや遊具、そして食育のための家庭菜園など、それらを庭に迎い入れ、その「用」だけでなく庭的「美」を持って再構成しなければならぬ。家、通路、畑・菜園、庭、駐車場、物置、立水栓、それら全てを含む新しい庭。そのあるべき姿が茶庭を通して

垣間見られるのではないだろうか。私たちは、もう一度、庭を解体し、茶人たちのように自分たちが求める姿を追い求めなくてはならない。そのことが、豊かさや美しさ、幸福というものを求める心Ⅱ庭に埋められている心、につながっていくのではないかと思う。

さて、平成は、私たちから古き概念を打ち壊し、古き良きものを選ばしてくれる「チャンスの時代」でもあったのだ。新しい庭が目覚める時だったのだ。

最後に自身の、そして我々への警句として、ジャック・ブロスの言葉を記したいと思う。

「このようにキリスト教会が勝利をおさめてからというもの、崇めることの許される樹はただ一つ、贖い主がその上で死んだあの四角い木だけになってしまった。他の崇拜はすべて禁じられ、それらを一扫しようとして福音伝道者たちの払った熱意については周知の通りである。

多様性、相互補完性に根ざし、複合的で互いに関連し合った宇宙論―古代の「多神教」がそうである―に代わって、教権的、不寛容で二元論的な一神教がその跡を引き継ぐことになった。善悪の区別という名のもと、古い精神状態に対する反動から、魂は肉体から切りされ、人間は自然から隔てられた。当然神につながるのは魂であるから、自然も肉体も必然的にそこから排斥されたのである。自然や肉体は人を誘惑に駆りたてるものにすぎず、エデンの園追放に責任を負うべきかつての知恵の樹の蛇のように、悪魔の手先以外にはなりえなかったのだ。(中略)

こうして生きとし生けるもの同士の交感の上に立脚していた生命のバランスは崩壊し、その最終的な影響が今日人類の上にふりかかっている。かつて開放的だった人類は次第に自らの内に同

じこもり、その頑な人間中心主義のため、もはや人類以外の存在は物としか映らなくなってしまった。自然全体が価値を下げることになったのである。かつて自然の中では、すべてものが何かのしるしであった。自然それ自身がある意味をもち、人はそれぞれ心の内でその意味を感じとっていた。しかし人間はそれを見失ってしまったがゆえに、今日自然を破壊し、またそうすることによって自ずから裁かれているのである。」⁸

庭に息づく人々の心を考えると、庭は決してモノでも器でもなく、商品でもなく一人一人の心のカタチだと言え、その心から夢を取り出し、カタチを与えることが、庭という場所であろうと信じている。だから、庭は面白いのだ。分割できない私たちの心が眠っているのだ。

感謝を込めて

最後に、本冊子を制作するにあたり、ご指導頂いた友人であり哲學家島田哲夫氏、長い時間を費やして原稿へのアドバイスと編集をお願いしたヤマドリデザイン事務所の嶋秀樹氏へ特別な感謝を記したい。また、庭作りで出会った多くのお客様にも今一度感謝の念に堪えない。皆さんのご意見を聞く中で、私たちの考える庭の輪郭や方向性を知ることになった。2003年に創業し、多くのお客さまに庭作りを依頼して頂いたが、その中でも、今は安らかに眠られている施主の方々のお言葉は今も庭の中に蘇り、励まして頂いている。感謝。

参考文献

- 重森三玲著 「枯山水」 中央公論新社
重森三玲・重森完途著 日本庭園史大系 上古・日本庭園源流1 社会思想社
宮本常一著 「日本人の住まい―生きる場のかたちとその変遷」 百の知恵双書
藤森照信著 「フジモリ式建築入門」 筑摩書房
小林秀雄著 小林秀雄全作品27・28 「本居宣長」 新潮社
ペネロピ・ボブハウス著 高山宏日本版監修 「世界の庭園歴史図鑑」 原書房
中山理著 「イギリス庭園の文化史」 大修館書店
森蘊著 「作庭記」の世界」 日本出版放送協会
関根正雄翻訳 「創世記」 岩波文庫
W・J・オング著 「声の文化と文字の文化」 藤原書店
企画・編集 株式会社創園 「創園」 株式会社ミサワホーム
中沢新一著 「精霊の王」 講談社
中沢新一著 「カイエソバージュリーV」 講談社
藤森照信著 「茶室字」 六耀社
神津朝夫著 「茶の湯と日本文化」
飯島照仁著 「ここから学ぶ 茶室と露地」 淡交社
岡倉覚三著 「茶の本」 岩波文庫

夢みる庭の話 光山 章

発行日 2021年8月1日

編集 株式会社ヤマドリデザイン事務所

製本 株式会社ヤマドリデザイン事務所

発行 株式会社フィトライフ

〒563-0022 大阪府池田市旭ヶ丘3-1-27

<https://phytolife.jp>





 *PhytoLife*
植物のチカラを暮らしに

